KIS生徒「悪戦苦闘」の最高に充実した研修を経験！

KISではじめて実施されたフィリピン研修旅行が、7月22日から8月5日までの約2週間の日程で実施され、高等部生徒8名と引率教員2名が参加しました。今回の研修は、英語力の向上、フィリピンの歴史的・文化的な多様性への理解などを目的に企画・実施されました。研修の3週間前から、放課後に引率のジェレミー先生による英会話の「特訓」やフィリピンの歴史・文化に関する事前学習も積み重ねました。

中身の濃い充実したスケジュール内容に、生徒たちは「悪戦苦闘」しながらも、一人ひとりが大きく成長し、「しなやかな強さ」（Resilience）を身につけて無事帰国しました。ここでは、研修期間中に現地から随時送られてきた引率の社会科教員・池田大介先生のレポート（要約）を中心に、その‘息吹’を伝えます。

「濃密な湿気」の中、フィリピンでの研修始まる

7月22日（日）、関西空港から飛び立った私たち一行は、一路フィリピン、マニラへ！出発前日、大雨で冠水したマニラとの報、ずいぶん心配したのですが、少々の乱気流にドキドキのジェレミー先生と私の小さな叫び声以外は、何も問題なく到着した現地では、雨と蜂蜜のような、とでも言うのでしょうか、〝濃密な湿気〟のお出迎え。

私たちは、受入れ団体のひとつである韓国の国際協力NGOであるアジアン・ブリッジのホームへ。セキュリティに完全に守られた閑静な住宅街の一角に、アジアン・ブリッジのオフィス兼研修施設があります。本当に静かです。庭にはマンゴーの木や、ココナッツの木が生え、ときおり甘いほのかな香りが…。

第一夜～第二夜。生活（宿泊施設・食事の注文などなど）、オリエンテーション・説明会（フィリピンの政治・経済・文化・生活・風習・宗教などを知る）、観光案内（7月23日：チャイナタウン、スペイン植民地統治時代歴史美観地区、アメリカ・日本植民地支配時代遺跡探訪）は、すべて英語！最初はさすがに恥ずかしい様子でしたが、二日目には、ジェレミー先生のおかげで、〝肩の力を抜いて、間違うことをおそれず、まず口を開いてみる作戦〟で、みんな自然に英語が口について出てくるようになってきました！これだけでも、「フィリピンに来たかいがあった」と確実に言えるでしょう！

フィリピン三日目。フィリピンの名門女子校（保育所・幼稚園～大学）・ミリアム高校へ。校長直々のオリエン（これまたすべて英語）のあと、KISの生徒は一人ひとり離され、正規の授業へ。大きな拍手とともに大歓声に包まれ照れながらの入室が印象的でした。その後、日本語の授業へ招かれ、質問攻めを受けたそうで、その後宿泊先であるホテルのような女子寮へ！高等部3年生も旅行に参加しているので、受験指導を数時間。

フィリピン短期研修も後半に突入します。明日からは、いわゆる最貧困地域の学校建設を手伝ったり、そこで暮らす子どもたちに食事を提供したり、と〝お客さん〟から、転じて、逆の立場になったり、一般家庭にホームステイしたりと、環境が大きく変わりますので、さらに気を引き締めて行動しなくてはなりません。

ミレアム高校の英語での授業に“半泣き”状態のKIS生徒

ミリアム高校は、フィリピンの名門、私学の雄として非常によく知られ、フィリピンの富裕層の子どもたちが通う、保育所・幼稚園～中学校～高校～大学（博士課程まで！）の一大コミュニティー。クリーム色のブラウスにうぐいす色のスカートがユニフォームのカトリックスクールです。そこに土曜日まで滞在、一週間弱のプログラムをKISの生徒は受けます。欧州と日本のインターナショナルスクールでの勤務経験がある私から見ても、なかなかきついプログラムのようですが、朝・昼・夕方に、聖書の一節が全校放送され、こちらまで敬虔な心持ちになる雰囲気で、落ち着いて学べる絶好の場所とも言えます。ミリアム高校は1クラス38名で、日本と比較して横長の教室に生徒達が整然と並ぶ〝お嬢様学校〟とでも言うのでしょうか。

しかし、のんびりした雰囲気はありません。理系科目に特に力を入れた（なんとロボティクスのクラブまで！）、一部の外国語系の科目を除き、すべて英語で授業がなされ、先生方の高学歴が特長とも言えます。「いじわるな」私の観察でも、なかなか居眠りをしている生徒を見つけるのが難しいくらい、生徒一人ひとりが目的意識と使命感を持って、プライド高く勉学に勤しんでいる、という雰囲気に満ち満ちています。これが、ミリアム高校を名門と呼ばせている由縁でしょう。

授業がすべて英語で展開されているので、KISの生徒にとっては、いかなる教科・科目も、すべて英語の授業。生徒達は、ギリシア文学（なんと、中学3年生がソフォクレスの「オイディプス王」を精読！）や英文学や物理や数学や社会学や歴史の授業に参加して、一日目から試練の連続、という感じです。KISの生徒は、一部を除きみんな〝半泣き〟状態です。英語科のジェレミー先生と私の感覚では、KIS生徒らは英語の聴き取りは、完成度高くできるものの、スピーキングに難あり、という感じ。

8名全員に「英語集中講座＆平和学・リーダー学ワークショップ修了証書」授与

それも、一日二日と経つにつれ

て、ブロークンながらも、とにかくコミュニケーションをはかろうとする姿勢が顕著にあらわれ、ハラハラで始まったにもかかわらず、今では確実に英語力の〝伸び〟を感じさせます（私とジェレミー先生が保証します！）。そこには、ジェレミー先生の一人ひとりのレベルにあった、一人ひとりに向き合った事前学習・個人指導の成果も現れているようです。ジェレミー先生に感謝！

生徒たちは、通常授業の他に、「リーダー学」～「リーダー養成講座」、「平和学」等、ミリアム高校では、ふつうに設定されている講座ながらも、日本ではまだめずらしい講座を今回受けさせてもらえることになりました。それらはワークショップ形式で進められていきますので、黙って座っていられませんし、具体的な参加もガンガン求められます。非常にしんどいこと必至ですが、生徒一人ひとりが、それぞれ「握りこぶし状態」でやる気を出してくれていますので、教師は一歩下がって見守ることにしたいと思います。

生徒たちの頑張りもあり、最終日には「ミリアム・カレッジ・ハイスクール英語集中講座&平和学・リーダー学ワークショップ修了証書授与式」が行われました。ミリアム・カレッジの校長のフォミン博士により、ＫＩＳ生徒に対して「修了証書」が授与されました。この日、ＫＩＳの生徒〝８名〟は、人前に立ち、たったひとりでプレゼンテーションを、しかもすべて英語でおこなわなければならず、みんな緊張の極致に…。しかし、ひとりの例外もなく、８名全員が、立派にプレゼンを行いました！ずーと、つかずはなれず（指導し）見守ってきたジェレミー先生と私の目に〝涙〟が…（笑）。感動的な修了証書授与式でした！

貧困がさらに貧困を生／産む“負のスパイラル”

フィリピンのいくつもの顔。スペインとアメリカと日本の、各々の統治時代と、そして「今」。〝神〟と（精）霊を感じる圧倒的な大自然、その悠久性とセメント文化的現代（社会）性。これら両極が、清濁併呑とでも言おうか、言わば、矛盾なく（？）相反しながらも相容れながら共存する国、愛すべきフィリピン！

我々一行は、彼の国に２週間目の〝膝栗毛〟（笑）！疲れも出てきました。日本が、そして、家族がなつかしく、さみしくもなってくる頃。数十カ国に生徒引率経験がある私の経験では、「ムスっとして自分は不機嫌なんですよ、と主張する」か「他人に（正当論で）八つ当たりし始める」か。やっぱりそれらがこの旅行でも出てきました（笑）！人間は、みんないっしょ、どこででもいっしょ。その時に何ができるか、それを見極めるのも教師の仕事、それを見守るのも教師の仕事。その時でした！高等部３年・金基聖君から「みんな疲れているから、そんな時こそ声をかけあおう」と。うれしい瞬間…！加えて、こうも言っていました。「僕たちは先生方より『若い』んだから、疲れの回復も早いはず」、と（笑）。ありがとう、基聖君（笑）!?さすが、高校３年生ですね！

我々は、（所謂）ゴミの山で世界的に有名な『スモーキーマウンテン』、トンド地区へ（前日の台風で、ゴミの山が崩れる危険性と膝下まで溢れる水たまりのため、視察は断念…そのかわりに初代ゴミの山の視察へ！）。現地のＮＧＯによるオリエンテーションで〝貧困〟の現状と現実に関するレクチャーをたっぷり受け（やっぱりここでも全て英語）、案内されその現場へ。海のすぐそばの（まさに波打ち際！）、住むには危険で不衛生とも言える場所に、ビニール袋と波で運ばれてきた木っ端でつくられたバラック小屋とも言える家々（と呼ぶには多少の逡巡が…）。しかも、そこでは、前日の台風で波もまれた大きな船の錨が吹っ飛んできて、いくつかの家を壊し、一人の少年の命を奪ったと言う。

悲しいほどの現実。貧困がさらに貧困を生／産む〝負のスパイラル〟。それはまさしく内容はちがえど、小林多喜二の「蟹工船」の世界か!?次に、カパス地区へ。ＩＢＳ（イマニュエル聖書学校）を訪問。そして、現地の公立中学校・高校の分校を訪問。含羞含む生徒たち。なぜか懐かしく、数十年昔の日本を思い出すことしばし。そこで、我々の訪問の意図を伝えるべく、生徒たちのまたまた英語スピーチ。

トップバッターは、私たち旅団のムードメーカーたる高等部１年・河光希君！堂々としたしゃべりっぷりに、この研修の成果の一端を見ました。ここまで来ると生徒たちも英語にすこしずつ慣れ、話す内容もともなってきたように。しかし、ＫＩＳのことを英語で話そうとしても、今までその必要性に迫られなかったせいか、みんなしどろもどろに…課題を発見した瞬間でもありました。

先住少数民族アエタ族との「まったく言葉が通じない」交流

フィリピンのルソン島西部、（噴火で世界的に知られる）ピナトゥボ山地に住むネグリト系少数民族であるアエタ族は、先住民族として知られ、人口約１５００人。伝統的には、移動・焼畑農耕と採集・狩猟生活を営んでいます。

四輪駆動のジープ３台に分乗し、一路、ピナトゥボ山の麓へ。途中、道なき道をかき分けかきわけ、ピナトゥボ山の方角へ。途中の途中、噴火の際の溶岩の流れによってできた〝道〟が〝川〟の流れを形成し、四駆が上下に激しくバウンドしながら・水しぶきをあげながら、ひたすら突き進んでいきます。冒険（笑）の始まりです。やがて、ジープは、麓へ到着。ここからは全て徒歩で登山です。膝下の深さの〝川〟をバシャバシャ・ズブズブ言わせながら渡り、水牛の荷車と遭遇しビビりつつ、一路、少数山岳民族アエタ族のコミュ

ニティーへ。

日本では、人工的な建造物の合間に、細々と緑が垣間見える、という感じですが、ここは、圧倒的な自然、というよりはジャングルの中に、竹でできた家々が点在するという感じ。まさに、自給自足で今も伝統を守り続ける少数山岳民族のコミュニティーという感じ。教師を含む10名が、4グループに分れ、ホームステイへ。

まったく言葉が通じません！コミュニケーション・ツールとしての言葉のありがたさを痛感。それ以前に（以後、も）、コミュニケーションの大切さを、教科書的ではなく、まさに体で感じつつ。おもしろかったのは、通じないのは分かっていながらも、生徒達はボディランゲージで、なぜか英語を添えながら（笑）。生徒達の柔軟な姿勢に脱帽！

なかでも特筆は、高等部2年・金俊君のバイタリティと順応性。アエタ族の狩人たちが凛々しくも勇ましい姿（筋肉隆々の素肌に〝（最小限度の）腰巻〟姿！）で登場（観光地化なんて全くなされていませんので、まさに〝ふだん〟の姿!?）し、本物のニワトリを使った狩りの仕方や〝調理〟の仕方や野生の動物を捕らえるワナの仕掛け方伝授の時間では、金俊君と高等部1年の河光希君がもっとも熱心に彼らとコミュニケーションをとろうと努力していた印象を受けました。その後、竹を調理器具とした彼らの伝統料理（竹蒸しにわとり料理に、竹で炊いたライス、キャッサバ芋など）を全て完食。ごちそうさまでした（鶏から出たスープが絶品！）。

次の日は大雨に悩まされながらも、川を徒歩で・ジープで渡れるかに悩みつつ、現地スタッフと何度もなんども協議をし、フィリピン空軍の情報提供と指導もあり、一瞬のチャンスをのがさず渡河。なんとか問題を切り抜け、無事にもどってきました。

リフレクションタイム。アエタ族との時間を振り返るのです。NGOのマルビン氏の司会のもと展開され、一人ひとりのスピーチタイム（もちろん英語）。だれか先陣を切ってスピーチしたい人は?の問いかけに全員「しーん」。重くるしい時間が流れます。その時手をあげたのが、高等部1年・趙梨紗さん！トップバッターはなかなかできません。普段は様子見の彼女が、〝自分の英語〟でトツトツと語ります。がんばりました！それは全体の雰囲気を盛り上げました！感動的です。

その後、高等部1年の姜瑜羅さんも、先のスピーチの言葉入れ替え版ではない自分の言葉で、自分の知っている英単語を並べ、懸命に語ります。〝自分の言葉〟で。実直性が伝わります。感動的です。そして、高等部2年・朴尚銀さん。彼女のスピーチは、選んだ単語をかみしめ、発音に気をつけ、ゆっくりと流れていきます。その様子に、アエタ族の狩人たちもウンウンうなづきながら聞いてくれています。それら全体の雰囲気を、金基聖君たち、高校2年生・3年生上級生達が引き継いでいきます。決して、〝大統領のスピーチ〟ではありませんでした。が、話者の気合と感謝の気持ちがつくるハーモニーがすばらしい！おつかれさま、みんな！さあ、久しぶりのアジアンブリッジのホームへ！

フィリピン研修の成果を後輩たちに語り継ごう！

明日は、無事に（なんとか!?）飛行機に乗れそうです！高等部2年・姜瑜珍さんの病院行きの際のみごとな働きっぷり。ジェレミー先生と私が体調崩した時、あなたの言動がどれだけわれわれを助けてくれたことでしょう。大感謝です！あなたの英語もずいぶん伸びました！このフィリピン研修の成果をまさに体現してくれた生徒の一人です。これを自分のものだけにせず、（例えば、研修中に訪問した韓国国際協力団―KOICAで得たキーワード、「援助とは何か?」、「なぜ自国ではなく他国（フィリピン）を援助するのか、あるいは、援助しなければならないのか?」という、きっとあなたにとって今後へビーローテーションとなるだろう言葉とともに）後輩たちへ伝えていって下さい。

今回のフィリピン研修の真骨頂！そう、最初であるが故、パイオニアであるが故、さまざまな課題が浮き上がってきました。と同時に、最初であったからこそ、なしえたこともあったはず。胸をはり、前を見据え、語り部となり、今回のフィリピン研修旅行を語り伝えていきましょう！フィリピンでお世話になった全ての人々、出会ったすべての人々に…大きな声で…「ありがとうございました」。そして、「ありがとう、フィリピン！」

フィリピン研修旅行に参加して　高等部3年 金基聖

今回フィリピン研修に参加するにあたって、大学受験を控えているこの時期に行くかどうかで、とても悩みましたが、今振り返ると、参加して良かったと思います。なぜなら、社会的な貧富の格差や、文化的背景などの違いを肌で体感でき、私が渡航前に持っていたフィリピンへの先入観から抜け出すことができ、新たな価値観に気づきました。

ミリアム高校では、フィリピンの裕福層の人々の生活や、授業を体験することができました。次に行ったBagong Silanganは、フィリピンの貧困層の地域と聞いていたので、自分自身が適応できるか不安がありましたが、その場でも最高の歓迎を受けました。貧富の格差に関わらず、双方から温かいおもてなしと、心からの歓迎を受けました。KISから参加した私たちが恐縮するほどでした。頭で理解するだけでなく、実際に現場で体験することの大切さを実感しました。自分なりの“越境人”にさらに一歩近づけた研修旅行となりました。

フィリピン研修旅行を振り返って　KIS英語科教員 ジェレミー・アンドリュー・ハード

ここでは特に、今回のフィリピン研修をアレンジしてくれ、ともにすごしたNGO- Asian Bridgeと韓国も国際協力団（KOICA）から、相互に何を得たのか、という点について私なりに簡単に報告したい。

フィリピンの現地スタッフであるボナ女史が率い、ユージン・シムさんによってサポートされている韓国のNGO-Asian Bridgeは、私たちに有名な観光地ツアーだけでなく、マニラとケゾン市の日常生活も体験させてくれ、私たちに多くのチャンスを与えてくれました。

マニラ・イントラムロス地区の馬車、ケゾン市内、その周辺で、オートバイタクシー、バス、ジープニー、そして州をまたいでルソン高速道路を走るミニバンなど、私たちはすべての公共交通機関を体験できました。それによりフィリピンの都市・郊外や田舎の生活を、ザッとではありますが、見ることができました。買い物も、生徒たちに貴重な実生活体験となりました。街角の屋台で、あるいは大きなオープンマーケットで、巨大なショッピングモールで、現地のフィリピン人とも話をすることができました。

韓国国際協力機構（KOICA）への訪問では、韓国政府主催のプロジェクト・共同事業や、海外での開発が、インフラ整備と工業技術を深化させていく上で、いかに大きな影響を与える可能性があるかについて、生徒たちに紹介していました。先進国が、ボランティアリズム、つまり、スキルや技術やスポンサーシッププログラムの交換を通じた協力によってアジア共同体の形成をサポートする役割を果たすことができることについて、生徒たちが考える良い機会となりました。

Asian BridgeとKOICAの活動は、アジア諸国のコミュニティを形成・育成している国際主義の精神を実証しています。こうしたビジョンに若者たちが参加することによって、来るべき世代が、平和と繁栄の中で生活していけることができるよう願ってやみません。

SPECIAL REPORT

KIS、国連教育科学文化機関（ユネスコ）からユネスコスクールに認定

ESD（Education for Sustainable Development ー持続発展教育）を提唱しているUNESCO - ユネスコ（UN-国際連合 教育科学文化機関）のフランス・パリ本部は、2012年４月、本学園をユネスコスクール（ASPnet: Associated Schools Project Network）に認定しました。日本国内では459校（2012年7月現在）幼稚園、小・中・高等学校及び教員養成学校がユネスコスクールに参加しています。

本学園は建学の精神と教育理念に重なるESDを全教育活動の中軸として位置付けており、積極的に取り組んでいます。ここでは、来年1月に大阪で開催される日本・韓国・中国の高校生が集まる「東アジアフォーラム」準備セミナーの様子を現場レポートします。

東アジアフォーラム 第1回準備セミナー

２０１４年11月、ユネスコ本部・日本政府・文部科学省の主催で、33ヶ国の高校生が集まる「高校ＥＳＤ世界フォーラム」が開催（岡山県）予定で、その一環として、まず大阪で「東アジアフォーラム」が実施されます。このフォーラムは、高校生自身の手で運営を担い、日本全国のユネスコスクールに加盟する高校生が集結、韓国・中国の高校生を迎え、〝持続可能な未来〟を語り合い、議論し合う、まさに「高校生の・高校生による・高校生のための国際会議」です。

その準備セミナー（計６回）第１回目が、６月10日（日）、大阪府立大学の中之島サテライトで開催され、ＫＩＳからは、金蓮姫さん（ＫＩＳチームリーダー）、鄭俊くん、姜瑜珍さん、姜瑜羅さん、朴苑善さんが定期考査直前の忙殺スケジュールの中、参加しました。この５名のメンバーは、校内での応募に応え、課題の小論文（志望理由書）をクリアし選抜され、校内での決起ミーティングを経て集まったメンバーです。

この第１回のフォーラムで印象に残ったことを紹介したい。フィリピンのユネスコスクールから紹介された、ある「ジャンケン」のお話。ジャンケンとは、通常、グー・チョキ・パーという三つの分類を目的とするか、勝つか負けるかの便宜上の二分を目的とします。〝分類〟と〝勝ち負け〟しかし、ここでのジャンケンは、「あいこジャンケン」という、ひたすら「あいこ」になること自体を目的とし、「あいこ」になるまでジャンケンを継続するというもの。そこには〝分類〟も〝勝ち負け〟も存在しないのです。要するに、そこにあるものは…〝共有〟なのです。

学校での生活は、特別な行事を除いては、つまり、授業においては、個人の行動原理に即した、特に学習面におけるスキルにのみ依拠する場合が多いのですが、今回は、全てにおいて、「共有」をキーワードに、他校との協力、役割部署との連携が、求められるのです。フォーラム当日は、海外から多くのゲストを迎え、国際会議を運営していかなければなりません。

しかも、周囲は知らない人ばかり。指示も出なければ、指示をあおぐこともできない無援状態の可能性。確実に、ふだんの〝ＫＩＳ流（笑）〟が通じないことは確か。ここに、日常的に慣れ親しんだ〝サービスを受ける〟ことから隔絶されたしんどさがあり、〝保護され外野から野次を飛ばすかのような発言〟はタブーという、自己及び自分を含む集団の責任完結性があるのです。かくもしんどい「共有」は、きっとＫＩＳの「越境人」思想につながることでしょう！

東アジアフォーラム 第2回・第3回準備セミナー

東アジアフォーラムの第2回準備セミナーが、7月15日(日)、大阪市内にある大阪府立大学中之島サテライトで開催されました。この日は、午前10時から夕方まで①迎える側の心構え、②当日の役割分担、について講義やグループ討論などがみっちり行なわれました。東アジアフォーラムの議長団の一員として、ＫＩＳから高等部2年生の金蓮姫さんと鄭俊君が選ばれました。

続く第3回準備セミナーは、８月18日・19日の二日間の日程で開催されました。今回は、大阪～近畿を超え、全国から(北は北海道・南は九州まで！)、なんと数百名の高校生たちが集結、その熱気でクーラーはほとんど効かず、あらためて、ユネスコスクール加盟校一校一校の、そして代表参加生徒一人ひとりの底力と意気込みを知ることになりました。その大きなムーブメントに押されてか、大阪府立大学理事長・学長をはじめ、文部科学省、岡山県教育庁、大阪府教育委員会から代表が出席。

さて、われらがＫＩＳは…代表５名が、今回も活躍してくれました。リーダーの金蓮姫さんを中心に、鄭俊くん・姜瑜羅さん・朴苑善さん、そして、今回は副リーダーの姜瑜珍さんの代わりに岩田有華さん（初めての参加で、早速司会進行の大役、しかも英語担当。）が参加しました。本番の役割も決まり、金蓮姫さんと鄭俊くんが総会議長の大役。姜瑜珍さんは司会進行。姜瑜羅さんは渉外担当（しかもセクションのトップ！）。朴苑善さんは議場装飾担当。

持続可能な社会をテーマに喧々諤々ディスカッションを展開

今回、第3回は、全国の高校生たちが、２００８年実施の７ヶ国高校生国際会議を運営した経験のある現大学生の先輩たちのサポートの中、「国際会議を成功させる」ためのテーマ学習・ワークショップを経験しました。中でも、全国の高校生が、四名一組となり、データをもとに、世界の諸問題を、持続発展の阻害になるという視座で捉え直し、喧々諤々ディスカッションを展開。難しいのは、〝解答〟がないこと。そして、現在進行形の問題ゆえに、悲しいまでの現実、という〝(ある種の)痛みがともなう〟ということ…ディスカッションは真剣そのもの。

また、ユネスコスクールの大きな方向性として共有しているため、「(競争的で勝ち負けを前提とする)ディベート」ではなく、ディスカッションによる〝知の創造〟の練習も行いました。例えば、ディスカッションを通し、帰納法的な手法によって全員が意見や考え出し合って、必要に応じ止揚していくプロセスを体験、その上で普遍的な価値や考えを抽出していくのです。時間をかけ、他校の生徒と座標点と時間とテーマを共有する…。

時に、自分が否定される痛みにもたえねばなりません。時に、意外な援軍に顔をほころばせることもあるでしょう。そこにあるのは、『Ｋｏｒｅａを出発点とした「Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ」への道(筋)』でした。「自(分)を確立するには、他(者)と出会わなければならない」のですね！「ユネスコスクール始動」、その顛末や如何に！今後の展開が楽しみです。

第５回 KIS入学式と新入生歓迎合宿を開催

２０１２年度コリア国際学園中等部・高等部第５回入学式が、４月７日（土）に豊川市立いのち愛ゆめセンターで開催されました。真新しい制服に身を包んだ入学生と、その保護者、理事・教職員らが参加したこの日、学校は終始華やいだ雰囲気に包まれました。ＫＩＳの生徒総数も年毎に増えています。

入学式のあいさつに立った厳校長は、「自主的な人」「共に生きる人」「越境する人」を目指して、「コリア国際学園での学園生活を通じて夢を探し、育て、実現していく時間にしてもらいたい」と語りかけました。その後中等部１年生の朴彩実さんがコリア語で、高等部１年生の田浦佳祐さんが日本語で、「越境人になるよう全力で努力します」と宣誓を行ないました。

入学式後の学園生活にも慣れ始めた４月24日、25日、２０１２年度新入生歓迎合宿が、滋賀・琵琶湖青少年の家で開催され、新入生をはじめ在校生と教員全員が参加しました。合宿では生徒全員の親睦を深めるためにカレーライス作りやゲーム、運動会に興じました。また、ＫＩＳの「建学の精神」「教育の理念」をテーマにグループ別の討論を行いました。

第５期の生徒会選挙も行なわれ、高等部２年の朴苑眞さんが会長に選出されるなど新しい役員が選出されました。楽しく親睦を深めると同時に、ＫＩＳについて理解を深めた２日間となりました。

KIS生徒、韓国語弁論大会で活躍

高等部１年の梁英理さんが、３月21日（土）に東京・韓国文化院ハンマダンホールで開催された第５回クンホ・アシアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会の韓国語スピーチ部門で最優秀賞を受賞しました。

同大会（主催：クンホ・アシアナ文化財団、駐日大韓民国大使館韓国文化院など）は、母語を韓国語としない日本国内の高校生を対象にした大会で、この日韓国語スピーチ部門では、全国10都市での予選を勝ち抜いた７名が本選に出場しました。

梁英理さんは、「夢があるから」と題した韓国語のスピーチを表情豊かに表現しました。梁さんは、大阪市内の公立小学校を卒業し、ＫＩＳ入学後にコリア語を学び始め４年目です。同級生の中にはコリア語を学び始めて３年半で韓国語能力試験６級（最上級）を取得している生徒もいます。梁さんは賞状、トロフィーの授与とともに、今年８月には韓国研修ツアーに加えて慶熙大学国際教育院での３週間の韓国語研修の資格も与えられました。

また６月24日（日）、大阪韓国人会館で開催された第40回記念韓国語弁論大会においても、高等部２年の姜瑜珍さんが優秀賞を獲得しました。主催は韓国大阪青年会議所とソウル青年会議所。姜さんは「大切な私の名前」というテーマで熱弁をふるいました。ＫＩＳでは今後もこうした機会を積極的に活用しながら、コリア語のより一層の向上に努力します。

KIS生徒、立命館アジア太平洋大学（APU）の韓国留学生たちと交流

立命館アジア太平洋大学（ＡＰＵ）の韓国留学生たちが６月４日（月）、ＫＩＳ生徒らと交流会を持ちました。ＡＰＵのＣｏ-Ｋｏｒｅａというサークルの大学生たち17名が関西のコリア系の学校との交流を目的にして、この日ＫＩＳを訪れました。

ＫＩＳの第１期卒業生の宋宇蘭さんもＡＰＵのメンバーとして参加し、後輩の在校生らとも交流を深めました。ＫＩＳの厳校長はＡＰＵの学生にＫＩＳの紹介・説明を45分ほど行ったあと、大学生たちはＫＩＳの授業を自由に見学しました。

放課後は、進路指導部の池田先生と英語科のジョン・ホイル先生が進行する形で、自主的に集まったＫＩＳ生徒たち17名とＡＰＵの学生とのデスカッションが行なわれました。ＡＰＵの韓国留学生たちは、全員が英語、日本語、（当然韓国語）を流暢に話し、会場ではコリア語、英語、日本語が交り合う不思議な空間が作りだされました。

ＫＩＳの生徒たちからは、「大学で専門にしているテーマは何ですか」「ＡＰＵの学食は美味しいですか」「なぜ、ＡＰＵを選択したのですか」「将来の夢は何ですか」などたくさんの質問が出されました。ＡＰＵの学生が、そうした質問に真摯に応え、将来の自分のビジョンを堂々と語る姿が印象的でした。「今夏、ＡＰＵのオープンスクールに参加して見たい」などの感想を持つなど、ＫＩＳの生徒たちも大学生活を身近に感じ、大きな刺激を受けたようでした。

新寄宿舎が完成し、新生活が始まる

寄宿舎に入寮を希望する生徒の増大にともない建設中であった新寄宿舎が完成し、寮生は真新しい寄宿舎で生活を始めました。夏休み明けの授業開始の前日、引越しを終えた後、食堂堂で行われたミーティングでは、厳校長が「新しい寄宿舎で規律ある生活を通じて勉強をしっかりするとともに、他の寮生との友情を育んでほしい」と激励しました。その後舎監の池眞清先生らから、今後の寄宿舎生活について詳細な説明がなされました。

ＫＩＳ寄宿舎のビジョンは、建学の精神である越境人を育成する最高の「インキュベーター」を目指すこと。他のＫＩＳ在校生や寄宿舎生の保護者からも、「入寮したい・させたい」と思いあこがれる寄宿舎をめざす、としています。また、目標を自己実現に向けた自律・自立の心と態度の基礎を育成するとして、具体的には①自分と時間をマネジメントする力の育成、②他者への思いやりの心と態度の育成、③規律ある生活態度の徹底、④「学力」の向上、⑤リーダーシップの育成、を寄宿舎生活の目的としています。

授業開始日の８月21日の朝、午前７時に食堂に集まった全寮生は気持ちも一新させ、一斉に食事を済ませた後、元気に登校しました。今後、ＫＩＳ寄宿舎独自のイベントやグループ別の自主学習の実施など、さまざまな試みが展開されていく予定です。